



高齢社会とユニバーサルデザイン

世の中には老若男女、外国人、障がいのある人、背の高い人もいれば背の低い人もいます。右利きもいれば左利きも。このように世の中が多様性に富んでいるという大前提のもとに、より多くの人々が不自由なく利用できるよう、製品や施設、サービスをデザインしていく取り組みがユニバーサルデザイン（UD）です。

似た言葉に「バリアフリー」があります。こちらは高齢者や障がい者が特定の能力障害により製品や施設を利用できない場合、妨げる障壁を取り除いて利用しやすくするものです。

例えば、シャンプーとリンスが同じ形状の容器に入っていると、目の不自由な人には区別が付きません。そこで容器に点字を施すとバリアフリーになります。でも、困るのは目の不自由な人だけではありません。洗髪中は誰もが目をつぶる、そうした状況を考えれば、全ての人に当てはまる不便さです。そこでシャンプーにキザミを入れて区別できるようにする…こうなるとUDになります。どちらが良いという問題ではなく、UDの方が不便さの在り方を広く捉えた概念といえます。

今、そのUDが注目されています。日本人の平均年齢は47歳。世界で最も高い国です。来年は東京オリンピックですが、前回、東京で開かれた1964年の日本人の平均年齢は29歳でした。56年間で18歳も上昇したことになります。裏を返せば、高齢者が増えたということ。今の65歳以上の人口比率は28.1%。1964年は6.3%だったので急激な変化です。

人は誰でも歳を取ると身体にいろいろな変化が起こります。足腰が弱くなり、手先の器用さも失われていきます。耳も遠くなり、目も悪くなります。新しいことへの理解も遅くなってきます。その結果、若いころには何とも思わなかったことに不便さを感じてくる機会が増えてくるのです。

店に並ぶ商品の区別がつきにくくて欲しいものが選べない。初めて買った製品の開け方が分からない…。自分の周りが分かりにくかったり、使いにくいものだらけだったりしたら、社会から疎外されているように感じるかもしれません。

年齢を重ねても、いつまでも元気で活動的でありたい。そこで、毎日使う製品や施設、設備がお年寄りにも使いやすいよう十分に配慮され、何不自由なく暮らせることがとても大切になってきているのです。

社会の高齢化が進むにつれて、高齢者の製品事故も増えていきます。事故の多くは、誤飲・誤食や誤使用に起因するものです。使う人のことを考えたやさしい工夫は、使いやすさを提供するだけでなく、事故を未然に防ぎます。高齢者問題に対応する手段の一つとして、UDの考え方や取り組みを取り入れてみてはかでしょうか。



【参考になる情報】

1) 「共用品という思想ーデザインの標準化をめざしてー」、後藤芳一、星川安之、岩波書店、

2011年

2)「ユニバーサルデザイン 超高齢化社会に向けたモノづくり」、ユニバーサルデザイン研究会編、日本工業出版版、2001年

3)「ユニバーサルデザインの仕組みを作る」、川内美彦著、学芸出版社、2007年

4)「ユニバーサルデザインのちから 社会人のためのUD入門」、関根千佳著、生産性出版、

2010年

5)「ユニバーサルデザインの教科書 増補改訂版」、中川聰監修、日経デザイン編、日経BP社、

2005年

6)『『アクセシブルデザイン』ってなに 高齢者や障がいのある人に配慮した“やさしい”デザイン』、経済産業省産業技術環境局、環境生活標準化推進室